

平城京右京一条二坊・二条二坊の調査(平城第530次)

奈文研ニュースNo.54でお伝えした奈良文化財研究所本庁舎の建て替えにともなう事前の発掘調査の続報です。調査地は平城宮の西面中門である佐伯門の前にあたります。敷地南部から本格的にはじまった調査では、平城京造営にさきだち、秋篠川旧流路をまっすぐに整えて斜行大溝とし、最終的にこの大溝が、敷葉・敷粗朶工法を用いて丁寧に埋め立てられていることがあきらかになっていました。

その後の発掘調査の進展によって、一条南大路および南北両側溝が残存していることがわかりました。写真は西側から撮影したもので、奥の方に奈文研仮庁舎、その手前には基壇のみ復原した佐伯門があり、そこから西に伸びる一条南大路が写っています。道路を斜めに横切るように暗褐色と明黄色の土の違いが見えますが、この暗褐色の土が、斜行大溝を最終的に埋め立てた土になります。

この秋篠川旧流路の埋め立て土からは、木簡もみつかりました。なかには「奈良京」(平城京)と読めるものがあり、「平散」(薬物か)を運ぶ役夫(駆使丁)

が逃亡したことが書かれていました。「奈良京」という言葉の使用とともに、平城京と藤原京を対比的に用いていることから、平城遷都前後の様子を伝える木簡として注目されます。

一条南大路の規模は、両側溝の中心間の距離から幅約25m(70大尺)をはかります。さらに北側溝と南側溝をつなぐ南北方向の溝もみつかりました。この溝からは、土器や瓦等の遺物と共に、木簡も出土しました。大路を横切る溝で、現代の排水溝のように、蓋で覆う暗渠だったのかもしれません。

また、北側の右京一条二坊四坪内では、奈良時代の井戸が5基みつかりました。なかでも、調査区北部でみつかった井戸は大型で、横板を井籠状に積む構造だったことがわかりました。井戸枠はほとんど抜き取られていましたが、最下段の横板のみ残っていました。その部材は、長さ約2.2m、高さ約25cm、厚さ約6cmですから、おおむね一辺が約2mの正方形の井戸だったと推定できます。この抜き取穴からは、木簡や墨書土器、三彩瓦、磚等とともに、奈良時代後半の土器が出土しました。

(都城発掘調査部 神野 恵)



一条南大路と南北両側溝(西から)